The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『咸陽宮』絵巻攷 : 冒頭部の漢籍利用を中心に
Author(s)	中本, 大
Citation	語文. 1993, 60, p. 10-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68854
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『咸陽宮』絵巻攷

―冒頭部の漢籍利用を中心に―

中本　大

『咸陽宮』絵巻は周知のごとく、『平家物語』等に見える咸陽宮における秦の始皇帝と燕の太子丹の説話に取材した室町時代物語である。『平家物語』諸本の咸陽宮説話については数多の先学の研究がある。中でも黒田彰氏の論考は、後代の受容までも視野に入れた精緻を極めたもので、『咸陽宮』絵巻の研究の上でも大変有益である。[1]しかし、室町時代後期以降の成立と目される『咸陽宮』絵巻の内容と『平家物語』の説話内容を比較するのみでは、大きく時代を隔てる二作品の価値を十分称揚することはできないであろう。

例えば、徳江元正氏が指摘されるごとく、[2]室町時代末の五山禅僧、惟高妙安の記した抄物『詩学大成抄』の「郊園門」には、次の文辞が見受けられる。

始皇ノ夫人ニ、華陽夫人ノ荆軻カ始皇ヲ打トテ、トリコメテ難儀ノ時ニ、后ノコトヒキソ、七尺屏風躍何不越ト云詞ヲ曲ニヒカレタヲキイテ、屏風ヲハネコシテ、ニゲラレタソ、平家ニモカタルソ、史記ノ始皇本紀ニハ平家ノヤウニハシルサヌソ、始皇ハ、大力、ハヤハザノ人ナリ

（「郊園門」）

「燕の太子丹の差し向けた刺客、荆軻と秦舞陽に迫られた始皇帝は、いまわの際に鐘愛の夫人、華陽夫人の琴の音を聴かんことを乞い、許されるが、その琴音に心を強くし、危うく難を逃れた」という物語のクライマックス部分に言及したこの記述、興味深いのは、「史記ニハ平家ノヨウニハ記サヌソ」という部分である。惟高ほどの学僧であれば、華陽夫人は始皇帝の妃ではなく、始皇帝の母后であったことは当然理解していたに相違ない。しかし、原典、「華陽国」の注釈の中で彼にとって最も身近な架空の物語をも言及せざるを得なかったのであろう。つまり、正統な歴史書には看取できない始皇帝妃の物語も、一蹴されることなく、漢籍の引用に次いで言及されるという柔軟な姿勢が見られるのである。即ち、往時、大陸の文学・史学に最も通じていた五山禅僧は、正統な歴史記述を把握した上で、虚構の物語を楽しむ別の一面をも有していたのである。かくのごとき視点から見ると、抄中、更に注目すべき記述が見られる。

燕カラ秦ノ始皇ヲウタウドテ、タハカリテ、樊於其カ首ト燕ノ国ノサシ図、督亢ト云処ノサシ図ヲ持テ、始皇ニ直ニミセマウシ、直ニ図ヲワタシマウセウト云テ、荆軻・秦舞陽ノ二人カ、

咸陽宮エイタソ、能ニスルコトソ　（「城闕門」）

右文から室町後期、平曲とならんで謡曲「咸陽宮」が咸陽宮説話を人口に膾炙させた重要な要因であったことが今更ながら実感させられるのである。

更に、挿絵の重要性を鑑みても、咸陽宮の物語と絵巻の絵柄を繋ぐ上でも五山禅僧の果たした役割は看過すべからざるものがある。『花上集鈔』を繙くと、次掲、仲方円伊の「咸陽宮図」への賛が収められている。

咸陽宮図　仲方円伊

羮々宮闕圧咸陽　羮々たる宮闕咸陽を圧す
天半簫歌楽未央　天半の簫歌楽未だ央きず
有徳匹夫皆廟食　徳有れば匹夫も皆な廟食なれど
一坏無客酬秦皇　一坏、客の秦皇に酬ゆること無し

仲方の別集『懶室漫稿』は零本で、賛詩の製作年代は確認できない。しかし応永二十年（一四一三）という彼の没年からして、足利義教のもとから後花園帝に「咸陽宮」図四幅が献上されたという『接網御記』の宝徳元年（一四四九）の記事を遡ることは間違いなく、[3] 室町時代初期から既に咸陽宮の画題が広く賞翫されていたことが裏付けられるのである。『翰林五鳳集』には、その他同題の天隠龍沢及び雪嶺永瑾という室町中・後期を各々代表する詩僧の賛詩が採録されており、室町期を通じて親しまれたものであったことも窺える。しかし画題の定着という点では、雪嶺を始めとする室町後・末期に顕著であり、仁如集尭（一四八三～一五七四）の「扇面荆軻秦舞陽咸陽宮上欲王図」賛や、別集『清渓稿』に収められた熙春竜喜（一五一一～一五九三）の「燕太子丹図」賛の他にも、同じく熙春の「阿房宮図」賛及び春沢永恩（一五一一～一五七四）『枯木稿』所収の「扇面咸陽宮」賛など数多くの画賛が確認される。中でも熙春が杜牧作「阿房宮賦」の措辞を用いながら賛した「阿房宮図」、

六国平来帰二一秦一　歌台舞殿別二一蔵春一
尭楷三尺弃如レ土　徒愛二紛奢一不レ愛レ人

は別集の詩題注により南禅寺塔頭の方丈に描かれた襖絵であることが知られる。

さて、この時期の作品の注目すべき特徴としては、仲方・天隠に代表される前代の作例が咸陽宮の滅亡という杜牧の傑作「阿房宮賦」に依拠した歴史的無常を眼目とするのに対し、

秦関百二似無鎖　漏却燕丹亡国愁　（春沢永恩「扇面咸陽宮」）

角生頭白足何恃　亀背寄身安泰山　（熙春竜喜「燕太子丹図」）

のごとく、燕の太子丹に関わる説話を言及する点にある。こうした背景に『平家物語』のあることは惟高の例もあり、黒田氏の指摘される通りであろう。[4] しかし、なぜこの時期に画賛が多出し、燕丹を詩材として好んで用いるようになるのだろうか。それも往時、一方で「読秦記」（琴叔景趣『松隆吟稿』）や「読阿房宮賦」（東山崇忍『冷泉集』）のごとく画題ではない場合には、前代と同様、杜牧賦に取材した作例に限定されることとは一線を画してである。

こうした事例からも、物語の一部を絵画化することが一般化し、それに付随して、正統な歴史書とは齟齬を来す物語の細部も容認され、架空の作品として叢林のごとき知識階層にも親炙していった時

代状況が裏付けられるであろう。更には仁如や春沢の賛のごとく、咸陽宮物語が襖絵や扇面画の題材であったことは注視すべきである。南禅寺には熙春賛の「太公望垂釣図」を含む扇面散らし屏風が現存しており、前掲の襖絵「阿房宮図」も扇面画が元来であった可能性がある。つまり、咸陽宮及びそれに付随する説話と画題との密接な関係は、後代の草子屋の『咸陽宮』絵巻への参与の点からも見過ごし得ないのである。

扇面画・屏風絵等と五山僧の関係の画賛を通して緊密なることは確認するまでもないであろう。事実、徳田和夫氏には、二十四孝の中の十二孝を描いた伝狩野元信筆墨画六曲一双に貼付された惟高・仁如等五山僧の画賛が、慶長年間以前成立の長谷川信春画の絵巻「二十四孝絵」の賛と共通することを指摘され、屏風絵に端を発した絵巻の存在を確認された例もある（『お伽草子研究』第二篇　お伽草子の展開、第四章「二十四孝」誕生前夜）。また、青山短期大学所蔵『咸陽宮』絵巻の箱には、扇面画を多数残した狩野派の絵師、狩野探信の筆を極めた紙片が貼付されているというのも[5]示唆的である。

しかしながら、『咸陽宮』絵巻の成立に五山僧が関与していたと短絡する意図は決してない。如上の時代背景を踏まえて、正統な歴史記述とは異なる幾多の説話や平曲・能を十分に活用したであろう『咸陽宮』絵巻の特質を、漢籍受容の側面から考察することが本稿の目的である。

なお、『咸陽宮』絵巻の諸本については伊井春樹先生の御論稿があり、[6]現存六本が示され、本文内容により二系統に分類されている。しかし先生の御指摘のごとく、書承等の前後関係には不明な点が多く、現存本のみから祖本や古態を探ることは困難であると思われる。したがって本稿でも諸本系統に徒に拘泥されることなく、各諸本の中の特徴的な記述を考察の中心とする。

一

伊井先生による絵巻内容の十分類に拠ると、『平家物語』や謡曲『咸陽宮』に拠らない『咸陽宮』絵巻の独自表現とみなしてよい部分に、冒頭①の秦始皇帝前史の記述がある。この部分、先生により『三国伝記』平仮名本との関係が指摘されているものの、一概には結論しがたい複雑な問題が存するのである。

この「始皇帝前史」は諸本を二系統で比較した場合、第二系統の二松学舎大学蔵本（以下、二松本と略称）・スペンサーコレクション本（以下、ス本）・信多純一先生蔵本（以下、信本）の三本が、六国滅亡・天下統一を始皇帝の所行として収斂し、始皇帝一代の伝記的側面を強めているのに対し、第一系統の穂久邇文庫本（以下、穂本）・大阪青山短期大学本（以下、青本）・専修寺蔵本（以下、専本）には始皇帝以前の戦国の七雄の攻防が委細に叙述されるという相違が見られる。しかもこの部分、漢籍利用の点でも興味深い問題を提示している。以下、青本冒頭部の記述を中心に検討していく。

青本の冒頭、書出は次のごとくである。

むかし、しんたむこくに、かんやうきうと申て、いかめしきたいり立られし事ありけり。その時のみかとをは、しんのしくはうていとそ申ける。此みかとのせんそをとふらへは、そのかみ、ぐしゆんの御ときに、はくえいといへるもの、君につかへ、民

をはく、むこうありしかは、そのとくをしやうして、ゑいしのしやうを給はりけり。

第一系統の中で、始皇帝の先祖を創業の柏翳にまで遡って記すのはこの青本のみで、咸陽城の創業者である孝公を以て物語をはじめる専本との相違なども含め、注目される。青本で続いて言及する秦の歴代は、柏翳の末孫の非子、非子の十二代の孫の繆公、繆公より十四代にあたる孝公、そして恵王・武王を経た昭（襄）王、昭王の子の孝文王、孝文王の子の荘襄王、そしてその子の始皇帝である。この系図を史書と照覧するに、『史記』の記述をほぼ簡略化したものであり、概して矛盾する点はない。掲出された人物も、周王より領地を分与され、秦を邑せられた非子を始め、名臣百里奚を士大夫に遇し勢力を拡大した繆公、衛の公孫、商鞅を用い法を制定し他国からの夷狄の遇を脱した孝公、范雎を用い周を滅ぼした昭王等、的を射ており至極妥当である。では青本の詞章が作成された際、『史記』は常時机辺に参照されていたと見なしてよいのであろうか。

往時、『史記』は『索隠』のごとき簡便な注釈書とともに読まれていたことは桃源瑞仙の『史記抄』の引用からも明らかであるし、或は『十八史略』を始めとする手軽な通史も広く行われていた。胡曽詩も初学向けの史書として最適であったろう。類書の存在も無視できない。実際、五山禅林にも宋代、黄継善の編した初学的史書『史学提要』を講じた桂林徳昌の抄物『燈前夜話』なども存在しており、浩瀚な『史記』原典に拠らずとも、青本のごとき記述は充分可能であったと思われる。しかし、『燈前夜話』に記される秦代の記事は、柏翳・穆（繆）公・范雎が項目として掲げられるのみで、青本の筆致とはほど遠く、直接的な関与は想定し得ない。また、『十八史略』と比較しても、非子・孝公をはじめ取り上げられた人物や事蹟等は矛盾しないものの、言辞の面で近い関係にあるとは言い得ない。(7)

如上、かくも細部の詞章の一致にこだわる所以は、青本には原拠を忠実に踏襲した部分が存するからである。即ち、秦の昭王と六国の攻防の記述に於てである。青本の記述は昭王と六国の事蹟に至って筆勢が一変し、詳細かつ躍動感溢れる印象的な文辞になる。

……〈前略〉……六こくとは、かん、き、そ、えん、てう、せいの六のくになり。六こくのしよこう、これをおそれて、日々夜々に、くはいめいし、いかにもして、しんをほろほすへきてたてをなすといへとも、秦のいくさ、れん〳〵につよくなり、南のかた、かん中をうはひ、にしのかた、はしよくをやふり、ひんかしのかた、かうゆのちをさき、北のかた、ようかいのぐんをおさむ。……〈後略〉……　（青本）

文中傍線部、一見して漢文脈であることの明らかなこの部分は、漢代、賈誼の名文「過秦論」をそのまま和文化したものである。原典当該部分を掲げると次のごとくである。

孝公既没、恵文・武・昭襄、蒙二故業一、因二遺策一、南取二漢中一、西挙巴蜀一、東割二膯之地一、北収二要害之軍一。諸侯恐懼、会盟而謀レ弱レ秦。

（『古文真宝』所収本文に拠る）

賈誼「過秦論」は、『史記』の「秦始皇本紀」の末尾に引用されるのを始め、『文選』にも採録された傑作であり、本国にあっても古来、親炙していたと思われる。しかし「過秦論」原典の構成や文辞には所収諸本により少なからず異同が存する。中でもこの部分、

『史記』所収の本文では第一行傍線部を「恵王・武王」とし、昭（襄）王に言及していない点は重要である。青本では昭王の事蹟として「過秦論」の詞章を利用していることを考えると、『古文真宝』との設定の一致は注目すべきものがある。また、『文選』では該当部分を「恵文・武・昭」とし、『古文真宝』に近いが、本国往時の流布を勘案し、以下の引用は総ての引用は『古文真宝』所収本文に依拠することとする。

さて、「過秦論」との一致は更に続く。四賢及び、六国の諸士を列挙する以下の記述である。

……〈前略〉……この時にあたつて、せいにまうしやうくん、てうにへいげんくん、そにしゆんしんくん、きにしんれうくんとて四君あり。これみなめいち、ちうしんのけんしんなり。さて、ねいえつ、じよしやう、とかく、そしん、これみなむねとのゆうしなり。そのほか、こし、そんし、たいだ、けいりやう、わうりう、てんき、れんば、てうしや、これらは一人当千のつはものなり。六わう、この人々にめいして、大ぐんをあひそへ、かんやうきうへむけられけり。……〈後略〉……

という青本の詞章は、

当二此之時一、斉有二孟嘗一、趙有二平原一、楚有二春申一、魏有二信陵一。此四君者、皆明智而忠信、寛厚而愛レ人、尊レ賢而重レ士。……〈中略〉……於レ是六国之士、有二寧越・徐尚・蘇秦・杜赫之属一、為二之謀一、斉明・周最・陳軫・召滑・楼緩・翟景・蘇厲・楽毅之徒、通二其意一、呉起・孫臏・帯佗・兒良・王廖・田忌・廉頗・趙奢之朋、制二其兵一。……〈後略〉……

右掲「過秦論」の人名列挙に忠実に即している。さて、斉の孟嘗君・趙の平原君・楚の春申君・魏の信陵君の四君は、宋代、王応麟篇の名数集『小学紺珠』巻五、名臣類上に「過秦論」や『史記』列伝を出典として収録されるのをはじめ、『事林広記』後集巻二・歴代類や『十八史略』巻一「春秋戦国・楚」などにも見え、唐土宋・元代には「四豪」或は「四賢」として慣用的に併称されていたことが確認できる。しかし、寧越・徐尚・蘇秦等が列記される例は他になく、現行類書等には拠らない「過秦論」と青本との直接的な関係が指摘できるのである。

また、六国を悉く平定し、阿房宮も完成し、満悦の始皇帝の言を記した、

ある時しくはうてい、あはうきうに出させ給て、よものけしきを見おろして、のたまひけるは、くはん中のかため、きんじやう千里、まことにしそん万世のこうなり、とよろこひ給ふ所に

……〈下略〉……

なども、「過秦論」原拠の記す始皇の言、

始皇之心、自以為、関中之固、金城千里、子孫帝王、万世之業也。

をそのまま書き下したものに他ならない。

「過秦論」利用の観点から、他の諸本に目を向けると、第一系統諸本の冒頭部で文辞の一致するのはすべてこの「過秦論」に拠った部分であることがわかる。即ち、専本の、

……〈前略〉……ねいえつ・しよしやう・そしん・とかくなと云ちほうのたつしやあつまりて、日夜心さしをはけまし、はかりことをつくしつゝ、つゐに、こし・そんし・たいた・けいり

やうなといふ名しやうに百万きのつはものをあひそへ、へいけんくん・しゆんしんくん・しんれうくん・まうしやうくん、この四君を大将として、しんのくにをほろぼさんために、かんやう宮にそおもむきける。

及び穂本の、

この時にあたつて、斉のまうしやうくん、てうのへいけんくん、そのしゆむしんら（「く」の誤りか）ん・きのしんれうくん、此四人は、めいちゆう長なり。しんけつなり。をの〳〵ちほうをめくらし、人をなつけ、衆をいさめて、長子・そんし・けいりやう・れんはなといふしやうくんに、百万のしそつをあひそへて、秦のみやこをせめさしむ。

の記述などは、人名配列が多少異なり、青本のように忠実な翻案ではないものの、四賢や六国の諸士を列挙する上で「過秦論」を参照していることは間違いないであろう。

同様に、第一系統本冒頭部との関係が指摘されている『三国伝記』平仮名本、巻二の第八話「秦の始皇帝、六国を并呑し給し事」との一致部分[8]も、実はこの「過秦論」を踏まえた記述に他ならないのである。当該部分を挙げる。

……〈前略〉……この時、せいの孟嘗君、趙の平原君、楚の春申君、魏の信陵君、この四君は、みな明智にして、ちうしんあり。くわんこうにして、人をあひせり。けんをたつとみ、しをおもんする。

然るに、しんの孝公、かんこく、二崎のようかいを、かまへて、いきほひをふるひ、六国をほろぼさんとす。これによつて、六国の王、たかひに、心さしを通して、しんをほろぼさん事を、あひはかり給。この時、六国に、寧越、徐尚、蘇秦、杜赫、陳軫、翟京とて、ちりやくのすくれたるめいしん有。呉起、孫臏、帯他、児良、王廖、田忌、廉頗、趙奢とて、ふりやくのすくれたるゆうし有。これらのともから、あひともに、はかりことをめくらし、つはものをとゝのへて、百万のくんせい、しんにせめよせ、あひたゝかふ。……〈後略〉……

（『三国伝記』）

列挙するのは人名のみだが、最も詳しい青本さえも省略する六国の士の陳軫・翟京の名を挙げる等、より原拠に近い所も見せている。

更に、『咸陽宮』絵巻第一系統諸本と『三国伝記』を比較するに、専本の前掲引用文に続く本文、

しんわうこのよしを聞給て、はつき・もうてんなといふしやうくんに五十万きのつはものをあひそへ、かんこくの関をひらきて六こくのいくさをまねき入、ふせきたゝかはしむる所に、

……〈下略〉……

の後半部、「六国の兵を迎え討つ秦軍が函谷関を開いて応戦した」という展開は、原典の「嘗以二什倍之地、百万之衆一、仰レ関而攻レ秦。秦人開レ関而延レ敵。九国之師、遁逃而不二敢進一。」に拠ったものので、文辞は異なるものの第一系統本にも共通する内容である。だが前半傍線部、「はつき・もうてん」が登場するのは諸本の中で専本独自の表現となっている。「はつき・もうてん」は「白起・蒙恬」で、共に秦の名将であるが、武安君、白起が昭王の時の臣下であるのに対し、蒙恬は始皇の世代の将軍という年代的矛盾をはらんだものとなっている。しかし『三国伝記』にも同様の混同が行われているのである。やはり先掲本文に続く部分に、

秦王、則、白起、蒙恬、内史勝以下の将軍に、おくまんの衆をそへて、くわんをひらきて、六国のくんせいを、おひき入、しきりにたゝかひをなさしめけるに、六国のつはもの、みな、こと〳〵く打ほろほされて、のこるともからは、すくなし。……

〈後略〉……

とあり、文辞はかなり異なるものの、「白起・蒙恬」という重要な語句での一致が見られる。年代的矛盾ということを問題とすれば、米沢本『詩学大成抄』時令門で、「狐白裘」の注として、「始皇ノキサキノテウホウガラレタソ、斉ノ孟嘗君カヌスンタコトアルソ」と記し、穂本同様、孟嘗君を秦の昭王ではなく、始皇帝時代の人物と誤るのをはじめ、岩瀬本『詩学大成抄』節序門でも、秦の孝公の臣下、商鞅を「秦ノ始皇ノ時ニ商鞅ト云者」とする例もあり、必ずしも稀ではない。しかし「韓信・白起」や「白起・王剪」を並べる例はあっても、「白起・蒙恬」は他に見出せず興味深い一致となっている。

「過秦論」の如き正統な漢籍が、『咸陽宮』絵巻の詞章に引用される契機としては、『三国伝記』のごとき説話を介在させたくなるが、既に検分したとおり、文辞の点での緊密性はなく、先に掲げた青本の、恵文・武・昭襄の各王が奪取した東西南北の地名の忠実な翻案等、『三国伝記』では見られない原拠の利用も『咸陽宮』絵巻には確認されるのである。

「過秦論」原典では、秦軍の攻撃の激烈かつ悲惨なるを「追」亡逐」北、伏尸百万、流血漂」櫓。」と表現する。即ち、倒れ伏した屍の数は百万、流れる血の量たるや、櫓を浮かべ漂わすほどであった、としている。この場面、『三国伝記』には見出せないものの、青本で、

みたれあふてたゝかふほとに、なかるゝちは川をなし、ほろふるかはねは山をなす

とあるのを始め、専本の、

しんのいくさつよくして、六こくのたゝかひやふれしかは、うちほろほさるゝ事かすをしらす、ち大河をなかしてたくをたゝよはし、かはねはかうかくとなつて行かよふみちもなし

右引用の傍線部、或は穂本の、

あはれなるかな、六国のつはものは長途に馬のあしをつからかしけるゆへに、たゝかひつかれてすくにいくさにかけまけけり。なかるゝ血はたてをたゝよはし、ふせるかはねは山とそなれる

傍線部のごとく、より原拠に近い文辞になっているものもある。しかし、その表現を比較しても、青本と専本を折衷したものが穂本に最も近い等、『三国伝記』も含めた諸本相互の関係は不明で、原拠「過秦論」を各々利用していることを指摘できるに留まる。

二

そうした中で先述のごとく、青本は他本に比べて「過秦論」原典の表現に最も忠実で、直接「過秦論」を参照しつつ詞章をなしたかのごとくである。「不老不死」絵巻の作者が、仏典を比較的忠実に翻案しながら冒頭天竺部を完成させたのと同様な趣向が[9]、この『咸陽宮』絵巻青本でも行われているのであろうか。その結論を下す前に今一度、青本冒頭部、秦の歴代の記述を検分したいと思う。

青本の歴代秦王の記述が、正史に比しても、ほぼ正鵠を射ている

ことはすでに述べた。しかし、青本には、「過秦論」に拠りつつも、独自の増補を行った興味深い部分がある。即ち、六国の諸侯が会盟し、謀策をめぐらした次の記述である。

これによつて、せいのひんわう・えんのせうわう・てうのけいふんわう・そのきやうわう・かんのきわう・ぎのせうわう、すへて六わう心さしをおなしうして、一天四かいのゆうしをまねき、ちうほうをおしますしぎやうして、しんをまよはさんはかりことをそめくらされける。

「過秦論」が、

諸侯恐懼、会盟而謀弱秦。不愛珍器重宝肥饒之地、以致天下之士。合従締交、相与為一。

とするのに大略依りながら、青本は原典にはない六国の王の名、斉の閔王・燕の昭王・趙の恵文王・楚の頃（襄）王・韓の釐王・魏の昭王を総て列挙するのである。この列記は『史記』や『十八史略』で確認できないのをはじめ、『三国伝記』・『太平記』諸本や『史記抄』・『古文真宝抄』等本国の抄物にも見出せないものである。

強大な秦に対抗する六国の会盟や合従・連衡を最も詳しく記すのは『史記』の「蘇秦列伝」である。しかし、蘇秦が尽力し、合従を成立させたのは秦の昭王の一代前、恵王の治世であり、この考えを進言したのは韓の宣恵王、斉の宣王らに対してであった。燕等、すでに王位の代わっている国もあったが、青本に記される六王の列挙は文中見出せない。だが、蘇秦以後も六国の密約は屢々行われたことは、『戦国策』を繙いても、各国の連合軍が秦と干戈を交える記事がしばしばあり、これを以て青本を誤りとすることはできない。逆に、この六王は青本の記す秦の昭王の時に在位していたことが『史記』の巻十五、「六国年表」によって確認されるのである。それだけではない。趙の恵文王は平原君を用いた国王であり、春申君は楚の頃襄王の、孟嘗君は斉の閔王の臣下であり、信陵君は魏の昭王の末子である。何等矛盾は存在しないのである。

如上、青本は整合性に留意しつつ綿密な調査を以て歴史を叙述している印象を与えるが、留保すべき点もある。一例を挙げると、青本は秦の孝公を「それ（繆公）より十四代にあたるをは、かうこうと申す。」と記す。繆公から孝公に至る歴代の事蹟を簡略化しながら述べるのは、『史記』『八史略』等、唐土の史書も同様である。しかし、『十八史略』では、繆公から孝公に至る歴代を、康公・共公・桓公・景公・哀公・恵公・悼公・厲公・共公・躁公・懐公・霊公・簡公・恵公・出子・献公として十六人列挙し、孝公を十七代目としているのである。一方、『史記』の紀伝をまとめると、康公・共公・桓公・景公・哀公・恵公・悼公・厲共王・躁公・懐公・霊公・簡公・恵公・出子・献公の順である。『十八史略』は厲共公を二公と誤認する誤りを犯しており、その点を考慮すれば、『史記』と同一で、孝公は十六代にあたるとするのが正しいということになる。ではなぜ青本では十四代としたのであろうか。

六国の諸王の名を正確に記すこととは異にするこうした筆致は更に一例看取される。秦の繆公の重臣、百里奚に関する記述である。青本では、

されは、この（繆公の）ときそかし、申屠はくりけいなんと、いふ、めいよのものとも、わか君のくにをすてゝ、ほつこうのしんとなり、まつりことを、かしこくおこなふかゆへに、くにのいきほひ、けう大になりにけり。

として、傍線部、「申屠はくりけい」と連記する。「めいよのものとも」とあり、申屠・百里奚を相異なる二者と解しているのは一目瞭然である。だが、その場合の申屠が問題である。

「申屠」は複姓である。したがってこれのみで特定の一個人を示すことはできない。その中で、唐土春秋戦国期までの「申屠」姓といえば『荘子』外物篇や『韓詩外伝』にもその名の見える申徒狄（「屠」と「徒」は通韻）が最も著名であろう。しかし『荘子』に拠ると、申徒狄は諫言の聴き入れられざるために石を背負い自ら河に身を投じた狷介の人とされるものの、その在世は記されていない。当然、『史記』の「秦本紀」には見られない。ではなぜ青本は殊更漢字表記を以て具体的に「申屠」の姓を記したのであろうか。

それに注目して『史記』を繙くに、申徒狄の名は「魯仲連・鄒陽列伝」の中に「是申徒狄自沈二於河一」という文辞で登場するのである。この部分、注釈書を参照すると、『集解』が「漢書音義曰、殷之末世人」として、申徒狄を殷人と解するのに対し、『索隠』では「申屠狄。按二荘子一、申屠狄諫而不レ用、負レ石自投レ河、韋昭云、六国時人」とあるように、「申屠狄」の表記の点でも青本と一致するのを始め、在世を殷ではなく、六国の時代と記すのは重要である。また、この「魯仲連・鄒陽列伝」では申屠狄に次いで百里奚の逸話が引かれているのである。

百里奚は元来虞の人で、後、斉に捕らえられ繆公の夫人の媵（嫁ぎ先に従附する臣下）となり、秦の繆公に用いられる所となる。しかし、これについて清代の梁玉繩は『史記志疑』の中で、『晋世家』では井伯・百里奚と連記されたことで実際媵とされた井伯が百里奚に誤たれて伝えられたことを指摘しているのは示唆的である。即ち、正史にあってもこうした本文の混同は少なくなく、後人、特に日本にあっては齟齬が生じやすかったであろうことは想像に難くない。おそらく「魯仲連・鄒陽列伝」のごとく、申徒狄と百里奚を列記するような場面、或はそれを引用する何らかの類書か抄物で『索隠』を敷衍させたごとき内容を持つものに引かれて二者の名を誤って連書してしまったとは考えられないだろうか。

『史記』等の史書で百里奚と並称される繆公の臣下には、後世「二老」と称される蹇叔がいる。「秦本紀」又は『十八史略』に充分通じていたのであれば、青本のように「申屠はくりけい」などとすることはなかったのではなかろうか。歴代を十四代とした記述とあわせて、些細な点であるとはいえ、青本冒頭部の性格を考える上で看過できない重要な問題を含んでいると思われる。やはり青本の詞章作成にあたっては『史記』や「過秦論」（『古文真宝』）を直接利用したと短絡するのではなく、こうした誤解を生じさせるような何らかの注釈書を用いていると考えるべきではなかろうか。それも室町末から近世初期にかけて、五山禅林で行われていた講説に劣らない高い水準の抄、或は手控えの存在が想像されよう。

『平家物語』とは一線を画す、室町時代物語の『咸陽宮』絵巻の世界を探る上で、第一系統本、特に青本の冒頭部は刺激的である。物語が進むにしたがって、伊井先生も指摘されるごとく、『源平盛衰記』や『太平記』などの類話をほぼ完全に踏襲していく姿勢とは異なり、この冒頭部の歴史叙述は名文「過秦論」を翻案することで、漢文特有の韻律の躍動感をもたらしている。参照したのは当然「過秦論」のみではないにしろ、『三国伝記』を含めた室町期の咸陽宮物語の一系統が賈誼の傑作によって収斂されることは留意しなけれ

ばならない。

三

秦の治世を論じた作品として賈誼「過秦論」に劣らぬ傑作に杜牧の「阿房宮賦」がある。既掲、五山学僧の詩題にも「読阿房宮賦」とあるのをはじめ、禅林の杜牧賛でも賦中の語句がしばしば引用されることは拙稿で述べたことがある。[10] つまり「過秦論」以上に人口に膾炙していたといっても過言ではない作品である。したがって室町時代物語である『咸陽宮』絵巻の詞章に多大な影響を与えていてもよさそうであるが、文辞の上での近似性はさほど強くはない。しかし、その中で、「過秦論」に拠っていない第二系統本にその影響が看取できることは大変興味深い。

ス本では咸陽宮の偉容を述べ、阿房殿の豪華な装飾を記した後、始皇帝の後宮に言及する場面が続いている。

①後宮の女御更衣、その数又おほく、秦王の愛幸をまちて寵せられんことをもとむ。②あしたに鏡をたてゝ、おもてに脂粉をほど（こ）す。霽天の星の雲にみゆるかとあやしまる。③髪をけずる櫛の音擾々として雲にひゞき、④蘭麝をたく煙のすえはよこたはりてかすみに似たり。⑤脂粉青黛をあらひすつれは、涇渭の水はさながら流れを濁らかす……〈下略〉……

第一系統本には見られない、唐土の伝統的「宮詞」を意識したが如き優艶な措辞であるが、こうした「過秦論」にはない後宮の表現が「阿房宮賦」には見出せるのである。

②明星熒熒、開粧鏡也。③緑雲擾擾、梳曉鬢也。④煙斜霧横、焚椒蘭也。⑤渭流漲膩、棄脂水也。

雷霆乍驚、宮車過也。

轆轆遠聴、杳不知其所之也。

一肌一容、尽態極妍。①縵立遠視、而望幸焉。

有不得見者、三十六年。

（『古文真宝』後集所収本文に拠る）

番号を付した傍線部の表現が各々対応しており、この部分、第二系統本は「阿房宮賦」を下敷にしていると考えてよいであろう。この描写をはじめ第二系統本の秀麗な文体は、製作者の『史記』等唐土の歴史・文学に精通した学識と美意識を実感させる優れたものであり、正統な出典を想定させるが、「阿房宮賦」との関連に限れば他は管見では確認し得ない。

如上、詞章の出典を中心に『咸陽宮』絵巻諸本の冒頭部を確認してきた。各系統が室町期に五山禅林を中心に人口に膾炙した『古文真宝』所収の二作品、賈誼「過秦論」と杜牧「阿房宮賦」の受容の相違で大別されることは大変興味深く、その上で当然『古文真宝抄』との関係が想定されるものの、彦龍抄・桂林抄等管見では『咸陽宮』絵巻に与えた影響は見出せなかった。また、二系統の諸本間でも第一系統の専本・穂本のみに見られる、戦乱の世の反定立として掲げる聖帝・賢帝の御代を讃えるという設定が、文辞は全く異なるものの第二系統本に見られる等、その相互関係には多くの疑問が残されている。そこで以下では更に『咸陽宮』絵巻の製作背景を探るべく、第二系統本の物語構成のに目を転じていきたい。

四

『咸陽宮』絵巻諸本で、文辞のほぼ一致する第二系統の三本であるが、その結末は一様ではない。ス本には田光先生譚以下の中巻に相当する部分が欠落していること、下巻には他本にはない項羽の咸陽宮攻撃と秦の滅亡、更には項羽の敗退、劉邦による天下統一までもが記されていることは、伊井先生の御指摘の通りである。ス本と同系統の二松本が、荊軻・秦舞陽の始皇帝暗殺の不首尾、及び『史記』の「刺客列伝」を典拠とする高漸離の後日譚を記し、「只天うんのつよき始皇帝のくわほうのほとこそめてたけれ」という祝言を以て物語を終えることを考慮して、下巻とのつながりから、中巻相当部分には第一系統の青本・専本に見られる徐福譚や始皇帝の薨去、臣下である李斯・趙高の勢力闘争、趙高の奢りと二世皇帝の暗殺、三世子嬰の擁立、といった要素が組み込まれていたことが想像に難くない。即ち、「云云亭」・「長城」・「阿房宮」・「東海」・「沙丘」・「咸陽」・「上蔡」・「殺子谷」・「軹道」という『胡曽詩抄』の秦史に関する詩題とその内容、及び「烏ノ頭白」・「不死ノ薬」・「指鹿云馬」と続く『連集良材』の秦についての記事を勘案してのことである。[1] 歴史上の故事に由来する詩題をほぼ時代に沿って配置する『胡曽詩』の初学書としての室町時代の文学における役割は屢々称揚される所であるし、一方の『連集良材』からは、絵巻の製作からも決して隔絶しているとは思われない連歌師の一般的な漢故事の知識が窺われるのであるが、その両書が秦の滅亡に至る大筋で一致していることから、五山詩僧の詩題にもしばしば見える、往時の「秦記」とはかかる要素を満たしていたと考えられるのである。そして、これだけの叙述内容を網羅しうるとすれば、ス本の中巻部分は二巻には相当し、元来は全四巻にも及ぶ長大な絵巻であったと考えられる。ではなぜ、同題を掲げる絵巻の中でこれほどまでに結末が異なっているのであろうか。当然、草子屋の意図が大きく関与しているであろうことは言うまでもない。これほど多くの諸本が存在していること、更に城殿が制作に乗り出していることら考えて、近世初頭、『咸陽宮』絵巻が需要の多い作品であったことは間違いない。それは、物語自体が見せ場に事欠かない上に、始皇帝への賛美で物語を終結させることにより、『文正草子』や『不老不死』に共通する祝言物の体裁を整えることが可能だったからであろう。青本や専本に見られる徐福譚を付加することにより、その祝言的色彩はより強固なものとなる。その意味で、物語の終末は、絵巻の依頼者（読者）と制作者との個別の事例により流動的に変わり得るものであったとも考えられる。その中で、長大な原「咸陽宮絵巻」を想定させるス本の存在は重要である。

ス本の下巻、項羽と劉邦の死烈な攻防を描く文辞は、『太平記』版本の巻第二十八、「慧源禅閤南方合体の事、付けたり漢楚合戦の事」にほぼ一致を見る。その『太平記』の記述自体が『史記』の「項羽本紀」・「高祖本紀」に拠っているので、『史記』との関係の密接なス本であれば、特に『太平記』を介在させる必要はないとも考えられる。しかし、ス本が祝言を以て物語を閉じることは実は他本と同様なのである。しかしその祝言は秦始皇帝に向けられたものではなく、劉邦の臣下として天下統一に尽力した張良の功績をたたえるものとなっている点が他の諸本と大きく異なっている。その部

分を挙げておく。

……〈前略〉……漢の高祖いくさにうちかち、天下すみやかにおさまり、漢の世つたはりて、七百年をたもちしことは、これしかしながら張良がはかりことよりおこれり。そもく張良は、みづからの手にかけてほこをふり、いくさをせしこと、一度もなし。たゞはかりことをむねとして、かたきをたいらげ、天下をおさめたり。されば、漢のかう祖のいはく、はかりことを帷幄のうちにめぐらして、かつ、ことを千里の外に決せしものは子房なり、との給ひけり。そのかほかたち、たけからず、いかにもゆうにうつくしく、さながら児のことくなれとも、そのちゑふかくして、はかりことは天下におこなはれて、忠臣良将のほまれをば、いまの世までもつたへたり。さても、下の橋に圯ておきなにけいやくせしことく、十三年のゝち穀城山のふもとにして黄なる石をもとめて、つねにこれをまつりしが、のちに赤松子といふ仙人にしたがひて、長生不死の素をなめ、こんろん山にのぼりつゝ、西わう母ともろともに、ともに命をたもちけるとかや。

単に漢の高祖を讃えるだけでなく、張良にまで言及することに如何なる意味があるのだろうか。実は、そこに室町期に一般化した新たな史観の影響が看取できるのである。即ち、「顚嬴蹶項」がそれである。

室町後期の抄物で桃源瑞仙の説を聞書した『蕉窓夜話』に次の項目がある。

嬴顚項蹶、如転眼、赤精之子已竜興此句ハ漁梁集ト云モノニアリ。元朝ノ末ノ集ソ。主ハ無ソ。常ニハ嬴顚劉蹶トアルソ。碁ノ詩ニモ作タソ。項蹶ハメツラシイソ。嬴ハ秦ノ姓ソ。項ハ項羽ソ。始皇モ項羽モ亡テノケタソ。顚倒シ蹶ヤウナソ。サウシテ高祖ノ竜ノ如ニ興テ天下ヲ保タソ。……〈後略〉……

即ち、「顚嬴蹶項」とは元来、韓愈詩等の古典に見られた「嬴顚劉蹶」たる定型句を改めた唐土、元末の『漁梁集』なる詩文集所収の上の一聯によって本国にも齎された新奇な表現であるというのである。「嬴顚劉蹶」は、秦（嬴姓）・漢（劉姓）両朝の衰亡の歴史を述懐するものであった。杜牧「阿房宮賦」に相通じる無常観である。

一方、「顚嬴蹶項」（項は項羽）はその単なる変型に留まらず、『蕉窓夜話』で記すごとく、宋代、羅大経著『鶴林玉露』の次の記述を契機に、更に新たな詩題を喚起させる重要な表現として理解・受容されるようになったと考えられるのである。

自レ古豪傑之士、立レ業建レ功、定レ変弭レ難、大抵以無レ所レ為而為レ之者為レ高。三代人物固不レ待レ言、下レ此……〈中略〉……張子房、顚嬴蹶項而飄然従二赤松子一遊。皆足二以レ高出二秦漢人物之上。左太冲詩云、功成不受賞、長揖帰田廬。……〈後略〉

……

（地集巻之四「功成不受賞」）

傍線部のように、「顚嬴蹶項」は高祖ではなく、劉邦臣下の名将、張良の偉業として解されている。即ち、大きな歴史の転換を一人の人物の所業に、それも一臣下の勲功に収斂する史観の象徴として用いられる表現であることが窺えるのである。それはやはり『蕉窓夜話』で言及される「碁ノ詩」に拠っても明らかである。

「碁ノ詩」とは明初成立の元詩の総集『元詩体要』所収、黄晋卿

の七絶「四皓囲棋図」賛を指すのであろう。

四皓囲棋図　黄晋卿

当局沈吟只謾労　区々勝敗直秋毫

顛嬴蹶項非君事　頼有安劉未著高

本国における「四皓囲棋図」賛の受容と展開については拙稿をもの[12]したことがあるので説明の繁を省くが、本国禅林詩壇における商山四皓材の詩作が橘中仙や王質の説話に附会され、時代を降るにしたがって陳套化していく状況を以前述べたことがある。その際、商山四皓を恵帝の補佐役として招いた張良の功績に注目し、天下安泰の礎を築いた偉人として詩中に詠み込むことが一つの眼目として捉えられるようになっていく過程を指摘した。こうした史観が、『史記』の「留侯世家」の物語性豊かな叙述と相俟って、「崑侖山に登り西王母と共に命を保った」というような『史記』の枠組にはおさまらない数多の説話の源泉となり[13]、例えば謡曲や幸若舞曲の詞章等に結実していったのである。

即ち、ス本のように戦国の歴史を語るに当たり、張良を以て物語を結ぶことは、唐土の影響のもとに育まれた正しく室町時代禅林的な史観を踏まえたものとして称揚されなければならないのである。したがって、『咸陽宮』絵巻第二系統は本来、ス本のように室町時代的史観に基づく長大な作品であったのが、依頼者の用途や制作者の都合に応じ流動的に切られ、そして現在、三本が残ったものと思われる。

結

諸本冒頭部及び、スペンサー本の長大な後半部を通し、『咸陽宮』絵巻の室町時代的側面を探求してきた。そこには当然室町期における『平家物語』や『太平記』の受容の問題等があり、簡単に結論付けることは難しい。しかし、絵巻の詞章が、「過秦論」や「阿房宮賦」といった『古文真宝』所収の言辞を参照していること、更に、『平家物語』の枠組に捕らわれることなく、「顛嬴蹶項」という新たな史観に裏付けられた壮大な歴史物語に転化させていったことは、学識豊かな製作者と高い教養の読者層を想定させ、室町時代後期の物語の中でも一際興味深い作品になっているといえる。

諸本の絵柄、個々の説話の異同等考察すべき面は多い。それについては、稿を改めて考察を深めたいと思う。

注

(1) 黒田彰氏著『中世説話の文学史的環境』（和泉書院）所収「咸陽宮覚書―朗詠注との関連―」

(2) 「抄物と能作者」（『橘香』三〇・五）

(3) 岡見正雄氏「御伽草子」（『講座日本文学6中世編Ⅱ』（三省堂））、伊井春樹先生「『咸陽宮絵巻』諸本とその性格」（『国語と国文学』平成四年四月）でも『接網御記』の記事を用いて考察されている。

(4) 注（1）に同じ。

(5) 伊井春樹先生「『咸陽宮絵巻』諸本とその性格」に拠る。

(6) 注（7）に同じ。

(8) 一方、第二系統本のごとく秦史を始皇帝伝に収斂することの典拠としては、元代、作者不詳の『全相平話』の一、「秦併六国平話」が「秦始皇伝」の副題を有することから注目される。胡曾詩を文中、屢々引用する点が本国の嗜好

と一致している上、様々な異説を含む全相、即ち全頁挿絵入りの上図下文のこうした講史書である平話の『咸陽宮』絵巻の成立への関与を想定し、検分したものの、全五種の平話の中でも「秦併六国平話」は最も史実に近く、所載の燕太子説話も特に注目すべき設定はなかった。また挿絵と絵巻の絵柄の一致も管見では見出し得なかった。

(8) 注(5)に同じ。『三国伝記』平仮名本の引用は古典文庫本に拠る。

(9) 福田安典氏「『竹斎』の周辺」(『語文』第五九輯)に拠る。

(10) 拙稿「一休宗純の杜牧賛について」(『語文』第五三・五四輯)

(11) 柳田征司氏が論稿「辞書・事典に連続する抄物群—詩文作成のための抄物の場合—」(『辞書・外国語資料による日本語研究』和泉書院)で紹介された慶長七年(一六〇二)梵舜等筆『史漢物語』も『咸陽宮』絵巻の成立を考える上で注目される。『一誠堂古書目録』第六一号(昭和六一・六)に掲載された斯書には、「秦孝公事刑法過分亡国」「秦皇漢武好仙事」「秦始皇事封禅松樹授位」「趙高指鹿称馬事」等の秦代の逸話が収められているという。現在、所蔵を確認し得ないため、詳細は不明だが、「史漢」という抄物に頻出する語彙を冠した書名を含め、考慮する必要があるだろう。

(12) 拙稿「本国禅林における橋叟説話の受容について」(『中世文学』第三六号)

(13) 張良説話の広がりという点では、万里集九(一四二八〜不明)の別集『梅花無尽蔵』巻第七所収「囲碁軸賛詩序」の中の「得赤松子之訣。至三国之時、自号大玄童子。」という典拠未詳の興味深い逸話への言及も注目される。

—本学大学院博士後期課程在学—